

『ゲンパツイラナイ展』 & 『ある百笑一家のふんとう記』

2012.09.22(sat) - 10.21(sun) 同時開催

〈アートリンク 上野-谷中〉 参加エキシビション 〈第20回 芸工展 2012〉

東京新聞 首都圏版 9.29 原発「イラナイ」アート展で発信 根津のギャラリー

ゲンパツイラナイ展

本橋成一 × スズキコージ



2012.09/22(sat) - 10/21(sun) 10時



LIFE 1 日本・南阿蘇

ある百笑一家のふんとう記



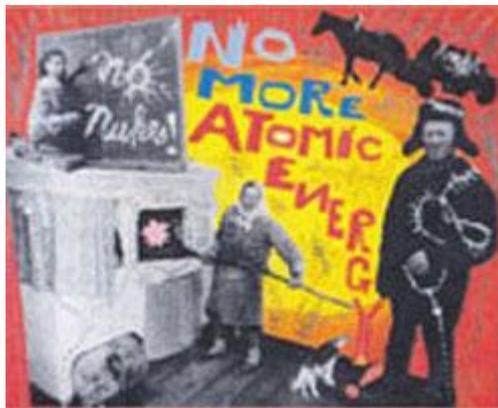
space A

『ゲンパツイラナイ展』 本橋成一 × スズキコージ

ある日、スズキコージはぼくのチェルノブイリ三部作の写真を思いきり切り刻んでコラージュを作りました。

それはぼくが思ってもみなかった、もうひとつの世界の出現でした。

彼の「ゲンパツイラナイ」への強い想い、そして、ぼくの想いまでもアートとして作り上げたのでした。(本橋成一)



(C) 本橋成一 スズキコージ



本橋さんの写真をコラージュにした、スズキコージさんの作品、売ってます！

熱のこもった、もの凄く純度が高い一枚一枚です。原画なので、コージさんが写真を切り抜いた痕跡がはっきりと判り、スズキコージファンならば感動ものです。

この一枚が貴方のお部屋にあれば、出勤前に必ず「ゲンパツイラナイ！」の意志を、コージさんや本橋さんと共に確認することができるはずです。ガンバリマショー！

絵：スズキコージ 文：別役実 装本：平野甲賀という稀少画集<ゼレファンタンケルダンス>(架空社)も売ってます！

本橋成一の写真集、DVD、スズキコージの絵本なども販売中。



<守れ節電 敵も必死だ 手ぬぐい><ゲンパツイラナイ 缶バッジ>も 売ってます！

ギャラリーなのでちょっと節電にはなってませんが、六時半には消燈して、自宅で節電中です。

本橋成一(写真家・映画監督)

東京都生まれ。1968年「炭鉱(ヤマ)」で第5回太陽賞受賞。1991年よりチェルノブイリ原発とその被災地ベラルーシに通い、汚染地で暮らす人々を写し撮る。1995年、「無限抱擁」で日本写真協会年度賞、写真の会賞を受賞。1998年「ナー ज्याの村」で第17回土門拳賞受賞。写真家として活動すると同時に、「ナー ज्याの村」「アレクセイと泉」「バオバブの記憶」などのドキュメンタリー映画も制作。最新作は写真集「屠場(とば)」(平凡社)。

スズキコージ(画家)

静岡県生まれ。1987年「エンソくん きしゃにのる」(福音館書店)で小学館絵画賞受賞。絵画や挿画のほか、ポスター・絵画・舞台美術などでも活躍。1989年「やまのディスコ」(架空社)で絵本にっぽん賞、2004年「おばけドライブ」(ビリケン出版)で第35回講談社出版文化賞絵本賞、2009年「ブラッキンダー」(イーストプレス)で第14回日本絵本賞大賞を受賞。画集やエッセイ「てのひらのほくら村」(架空社)も。

協力: [ポレポレタイムス社 <link>](#)

spaceB

### LIFE 1 日本 ● 南阿蘇 『ある百笑一家のふんとう記』

底抜けに明るい農家の写真展 & 再生可能エネルギー バイオマスってなーに？



タイトル/ [近正千広<link>](#)

ある百笑一家のこよみ 2013年版つくりました。絶賛販売中！





## 「土は私をつなぐ」

私(街に住む人)の話

東京の街を歩いているとよく道路工事をやっている。掘り起こされた下を覗くとそこは土の穴だが、そこからは土の匂いがしない。今夏自宅の草を抜き、車で近くの集積所へ運んだが、2週間は車の中から草の匂いがとれなかった。アスファルトの下の土から匂いがしないのは、草が生えていないことが原因かもしれない。アスファルトの下の土は陽も当らず呼吸もできずに、もう長い間死んでいるのかもしれない。私は死んだ土の上で毎日働いているのだ。

ただ、ちょっとだけ救われるのは、自宅に帰ると目の前に護岸されていない川が流れ、その周りには都会とは思えない雑木林と畑があることだ。営農力の強い農家が多く存在しているこの一帯には、そこかしこに今採れたばかりの野菜たちが露地売りされている。休みの日はそこに立つおばちゃんや、おじちゃんに「これはどうやって食べればおいしい?」と聞きながらせせと買ってきては、採れたての野菜を夫婦で食べている。

採れたての丸ごとカボチャなんて、皮ギリギリまで真っ黄色に熟していて、とってもおいしい! ロマネスコとかいうイタリアのカリフラワーなんて、鑑賞したくなるほど芸術的だ!! 見栄えは悪いが、江戸っ子もビックりするくらい辛いちっちゃな辛味大根、これには舌がしびれた!!! 休みの日はいつも小さな野菜たちに驚かされ、感服し、恐れ入りますと頭を下げている。

その食卓には、主役となる私の故郷熊本南阿蘇で作られた無農薬のお米があがる。熊本市出身の私は、蛇口をひねれば阿蘇からの伏

流水が出てくるという、大変恵まれた環境で育った。その雄大な阿蘇の湧水で育ったお米は、もちろんおいしい！

稲作の除草は、コイ(鯉)やアイガモなどを使った『恋愛農法』だという。

そうすることで、私は野菜の大半は自宅近辺で採れたもの、お米は故郷のお米で日常をまかなっている。地産地消ではなく、半地半故郷産地消なのだ。半自宅近辺産と半故郷産の土壌は、環境は違っていても『土』でつながっていると想うと、半地半故郷産地消でも幸せだ。

南阿蘇の恋愛農法をやっている一家は底抜けに明るく、子供たちは丸裸で田んぼの中を泳ぎ(?)まくっている。もちろんからだじゅう泥だらけで、オチ○○も泥だらけだ。その一家が今度、満を持して再生可能エネルギー発生プラント造成計画を立ち上げるそう。それはバイオマスというものを使ったエネルギー発生装置みたいだ。

#### 恋愛農法とバイオマスエネルギー！

実に斬新で、言葉そのものもなんて素晴らしい響きだ！このバイオマスを使ったエネルギーで集落をまかなっているところが、ドイツにあるらしい。ドイツ、さすがだ。しかし、ドイツも日本の農家も人種は違って、やれることは同じだと信じたい。ドイツもすごい、日本もすごいんだというところを都会の人にも見てもらいたくて、私は今回の百笑一家の写真展を開催することにした。今はオチ○○泥だらけだが、いずれ日本をしょって立つ百笑一家の子供たちの爆発的な再生可能エネルギーを、疲れたあなたに充填してもらいたい。と、街に住む私は思う。